

体育学習を通してはぐくむ確かな学力

マルチメディア支援係長 西 川 潔
Nishikawa Kiyoshi

要 旨

確かな学力をはぐくむための学習指導が重視されている中、体育科において大切にすべき学力について分析し、それをはぐくむための学習や指導の在り方について考察した。

キーワード： 体育科、確かな学力、学習指導、教具の工夫

1 はじめに

体育科の公開授業の後の話合いで、子どもたちの運動技能がどれだけ伸びていたかどうかにについて、協議されることがよくある。もちろんこれも大切な内容ではあるが、それに加え、学習過程において子どもたちがどのような学びをしているかについて考察することも重要である。そこで、体育学習における確かな学力について分析し、それをはぐくむための学習の進め方や指導の在り方について考察した。

2 研究目的

体育科における確かな学力のとらえ方、並びにそれをはぐくむための指導について考察する。

3 研究方法

- (1) 体育科における学力の分析
- (2) 確かな学力をはぐくむための体育学習
- (3) 子どもたちの学びを深めるための指導

4 研究内容

- (1) 体育科における学力分析

体育科における学力とは運動技能や体力とよく考えられ、毎年、10月の「体育の日」が近付くと子どもたちの運動能力や体力の実態が新聞等で報道される。もちろん運動技能や体力も体育科における大切な学力に違いないが、体育科の学力とは決してそれだけではない。それらに加え、「知識・理解」や「思考」も体育科の学力の重要な要素である。現在、小学校の指導要録で示されている体育科の評価の観点とは、運動や健康・安全への「関心・意欲・態度」と「思考・判断」、「運動技能」、「健康・安全についての知識・理解」である。しかし「知識・理解」は保健領域に限られ、運動領域では評価の対象になっていない。運動技能を向上させるためには、自分の運動のイメージをつかんだり、友達の運動を見てどのようにアドバイスすればよいかを考えたりするための基礎となる「知識・理解」や「思考」も大切になる。これらが伴わない中で運動を繰り返しても、運動技能の向上は期待できない。

指導要録で示されている評価の観点の基本をしながら、体育学習を通して子どもたちに付けたい学力を分析すると図1に示した四点であると考え。一点目は、自分自身や友達の運動を分析する力や運動に関する知識。二点目は運動の仕方や学び方について考える力。三点目は自己のめあて達成に向けて主体的に学ぶ力。四点目が運動技能・体力である。これら四つの学力を体育学習を通して培うことが、生涯にわたって運動に親しみ、健康の増進と体力の向上を図る子どもを育てることにつながるものと考え。

① 運動分析力や運動に関する知識	② 運動の仕方や学び方について考える力
③ 主体的に学ぶ力	④ 運動技能・体力

図1 体育科における四つの学力

(2) 確かな学力をはぐくむための体育学習

確かな学力をはぐくむ体育学習を進めるためには、子ども自身がどのようなめあてをもって学習に取り組むかが重要になってくる。表1は、マット運動を例に、子どもたちがもつめあてのレベルを示したものである。

表1 めあての高まりと具体例

めあてのレベル		具 体 例
A	自分のめあてを実現するために、どうすればいいのか、その方法がめあてとなっているもの。	「開脚前転で膝を伸ばして立ち上がるために今より50cm近くに足を着く。」
B	自分が目指そうとする運動の具体像はあるが、それを実現するための手立てをめあてとして、もてていないもの。	「開脚前転を膝を伸ばしてできるようにしたい。」
C	めあてが漠然としているもの	「開脚前転がきれいにできるようになりたい。」

自己のめあてを達成するためには、単に体を動かして運動するだけでなく、子ども自身が考えながら運動することが求められる。いわゆる思考力を高める体育学習であり、図1で示した「運動の仕方や学び方について『考える力』」でもある。

では、表1に示したAのように、子どもが具体的なめあてをもって学習に取り組めるようになるためには、どのようなことが大切になるのだろうか。それは、指導者から子どもたちへの具体的な助言や助力であると考え。例えば、運動がなかなか上達しない子どもに対して、「がんばりなさい。」

「もうちょっとだよ。」というような言葉がけでは、子どもは「何をがんばればよいのか」、「どこがもう少し」なのかが分からない。つまり、子どもたちはどこを直せばよいのか、そのためにどのような練習を行えばよいのかなど、自分の運動について考えることは困難である。そして、体育科における四つの学力の「運動分析力や運動に関する知識」「運動の仕方や学び方について『考える力』」を付けることにつながらない。

そこで、子どもたちに確かな学力をはぐくむために、体育学習では表2に示したような助言が大切になる。

表2 確かな学力をはぐくむための助言例（マット運動）

	子どもの運動の状況	助言例
①	「前転」で起き上がるときに、どうしてもマットに手を着いてしまう子どもに対して	「起き上がるときに、両手で膝を抱え込むようにしてごらん。」
②	「開脚前転」で起き上がれない子どもに対して	「起き上がる時に手をどのあたりに着けばよいだろう？」 「腰に近い位置？それとも腰から遠い位置？両方やってみて、考えてごらん。」
③	「跳び前転」で大きな運動ができるようになった子どもに対して	前の時間はマットの端から20cm離れた所に手を着いていたけれど、今日はそのときよりも10cmも遠くに手を着いていけるようになったね。どうしてこのように上達したと思う？

①では、指導者が運動のつまずきの原因を見付け、それに対して的確な助言を与えている。運動のポイントが示されることで、子どもは自分のつまずきの原因を理解するヒントとなる。

②は、つまずきの原因を示すようなアドバイスを与えながら、子ども自身に考えさせるものである。自己の運動分析や運動に関する知識が不十分なために、改善方法が分かりにくい子どもには、このようにヒントを与えながら考えさせる助言が必要である。何のヒントもなしに「考えてごらん、工夫してごらん。」では、運動技能の向上は望めないし、主体的に学ぼうとする子どもを育てることにもつながらない。

③は、子どもの運動技能の伸びを認める助言である。ここでは「上手になったよ。」「できるようになったね。」のような抽象的なものではなく、どこがどのようによくなったのかを具体的に認める助言が大切になる。そうすることで、子どもは自分の学習の仕方に自信をもち、自己効力感を高めることにもなる。そして、体育科における四つの学力をはぐくむために大きな働きをするものと考えられる。

(3) 子どもたちの学びを深めるための指導

体育科で子どもたちが主体的に学習に取り組むためには、運動技能の向上が不可欠である。何度練習を繰り返しても上達しないのでは、子どもたちの学習への意欲は失せてしまう。そこで、必要にな

ってくるものの一つに教具の工夫がある。図2、図3、図4の写真は、マット運動における教具の一例である。

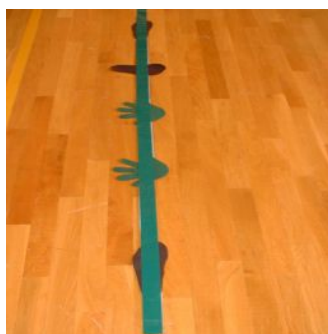


図2は、側方倒立回転の練習で、足がゴムひもに触れるように足を強く蹴り、腰の位置を高くして運動するためのものである。能力に応じてゴムひもの高さが調節でき、それを目標に運動することができる。

また、側方倒立回転の初期の段階では、手と足の着く位置を理解できないために、手足の動きが

図2 側方倒立回転① **図3 側方倒立回転②** バラバラになる子どもが多く見られる。それを解消するための教具が図3である。手形と足形を順に並べることで、手と足の着く位置が理解でき、運動しやすくなる。また、フェルト布を材料にしているので、表裏を反転させて用いれば、始動が左右どちらの手であっても対応できる。



図4は倒立を練習するときの教具である。倒立をするとき、着手の瞬間に頭が中に入ってしまうため、マット上に着く手の位置や視線が定まらない子どもにとって特に有効である。また、子どもの実態に応じて、それぞれの位置の間隔を変えることもできる。このような工夫した教具を活用することで、子どもたちは主体的に学習に取り組むことができる。

図4 倒立 教具の工夫については、子どもたちに「自分で考えてつくりなさい。」と指示しても実際は難しい。したがって、指導者から子どもたちに教具を提示する必要がある。主体的に学ぶ子どもを育てるために、何もかも子どもたちに考えさせることが、適切な指導とは考えていない。学びを深めるためには、子どもに考えさせることと、指導者が教えることとを明確に区分して、授業を展開することが重要である。

5 おわりに

体育科における「学力」の分析と、それをはぐくむための指導の工夫を中心に研究を進めた。体育科における確かな学力の向上は、これからますます重要になってくる。体育科は運動を中心とする学習であることから、運動技能の向上を図ることは当然である。しかし、それだけに留まらず、四つの学力の視点に基づいて、学習展開を進めることが大切であると考え。体育科におけるこれらの学力をはぐくむために、今後、更に研鑽を積んでいきたい。

参考・引用文献

- | | | |
|----------------------|-------|-----|
| (1) 小学校学習指導要領解説「体育編」 | 文部省 | 平11 |
| (2) 初等教育資料（平成17年4月号） | 文部科学省 | 平17 |